

# 翻訳概念の射程 — 文化の翻訳と喩としての翻訳

河原清志

Kiyoshi KAWAHARA

## The Range of the Translation Concept : Cultural Translation and Translation as Metaphor

### 1. はじめに一翻訳概念の多義性

「翻訳」という言葉はさまざまな意味合いで使われる。通常翻訳とは、ある言語で書かれたテキストを別の言語のテキストに変換する言語行為（言語間翻訳）を指すが、実際のところ、「翻訳」という言葉はメタファー<sup>1</sup>として使用されることで実に多義的な概念となっている。そのため、その定義を専門的に規定することも、翻訳（研究）の対象を特定することも難しく、結局のところ、人間の営為はすべて翻訳である、とさえ言うことができるかもしれない。

人間存在そのものが、本質的に「異領域間」的であり「翻訳」的だともいえる。  
(大橋, 1993, p. 32)

これは極端な見解であるが、その背後には「異文化間」の出会いおよび交流を、広義の「翻訳」と捉えて翻訳概念の脱構築を行う企てがある。そして、次のように異領域間・異次元間を行き来することも翻訳であり、その意味で人間の「生死」そのものが翻訳であると大橋は言う。

---

<sup>1</sup> 認知意味論の出発点としてメタファー論の転回を担った Lakoff & Johnson (1980) のメタファーの本質論は次の点に集約できる (谷口, 2003, pp. 9-44)。

(1) メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することである (経験基盤主義)。

(2) 人間の思考過程の大部分がメタファーによって成り立っている (主観的意味論)。

(3) 人間の概念体系がメタファーによって構造を与えられ、規定されている (カテゴリー論)。

通常、メタファーは、それによって比較的抽象的な、あるいは本来十分な構造を持たない事柄を、より具体的で構造化された事柄によって理解することができるという性質 (上記 (1) (3)) があるとされている (Lakoff, 1993)。

一般に「文化の翻訳」は、芸術や思想のそれであれ制度や技術のそれであれ、「同じ次元内」での水平的な移し—置きである。それに対して異領域間でなされる翻訳は、「異次元間」の移し—置きである。ふつうの意味での翻訳においては、原書と訳書とでは言語は異なっているが、あくまでも同一性の保持が基軸となる。しかし異領域間の翻訳に際しては、むしろ作品の差異化がより重要な眼目となる。(大橋, 1993, p. 31)

このように「翻訳」概念はメタファーとして使われる限り、果てしない可能性を秘めており、その可能性を追求して本来の意味での「翻訳」へ逆照射することでこれまでの翻訳研究で死角となっていた部分が詳らかにできる可能性もある。

そこで本稿ではもともと人類学の営為として提唱された<文化翻訳>を手がかりにして、メタファー（喩）としての「翻訳」の可能性を模索し、翻訳概念の多義性・多様性を探って、翻訳をめぐる意味空間を豊富なものにする試みを行う。

## 2. 翻訳概念の本質—記号間翻訳

翻訳学において、何を以って翻訳とするかという問いはひとつの大きな論点ないし争点である。一般的には、文学翻訳をプロトタイプとして、同心円状に非典型的な翻訳形態が布置されるのが翻訳概念である。そしてその外円には文化（の）翻訳と言われる、記号間翻訳が存在し、他方で翻訳類似概念（翻案<sup>2</sup>やローカリゼーションなど）もそこに布置され、隣接領域と境界画定を明確化すべきか、接点領域を拡大すべきかが問題となってくる。さらにその外円には翻訳をメタファーとして捉える見解、つまり社会的事象を翻訳と看做したうえで当該社会現象を分析する学派が存在することになる（河原, 2011）。

このような翻訳の捉え方の背後には、そもそも翻訳（特に以下の記号間翻訳<sup>3</sup>）は言語全般について、あるいはおよそ記号全般についての操作ないし実践行為そのものを包摂した概念であるとの考え方があると言える。これはR. ヤコブソンが翻訳の三類型として示したとおりである。

<sup>2</sup> 翻案 (adaptation) とは、一般的には翻訳と認められないものの、起点テキストを再現する一連の翻訳的介入であると考えられている。この用語には、専有化、同化、模造訳、リライトといった多くの曖昧な概念も含まれる (バイカー&サルダーニャ, 2013, p. 2)。

<sup>3</sup> 一般に「記号」とは、人間が「意味あり」と認めるものすべてのことであり、「記号現象（記号過程）」とは、人間があるものにある意味を付したり、あるものからある意味を読み取ったりする「意味づけ」行為のことである。そして、人間の意味づけの営みの仕組みと意義、その営みが人間の文化をいかに生み出し、維持し、組み変えていくかを論じるのが「記号論」ということになる (池上, 1984, p. 5)。

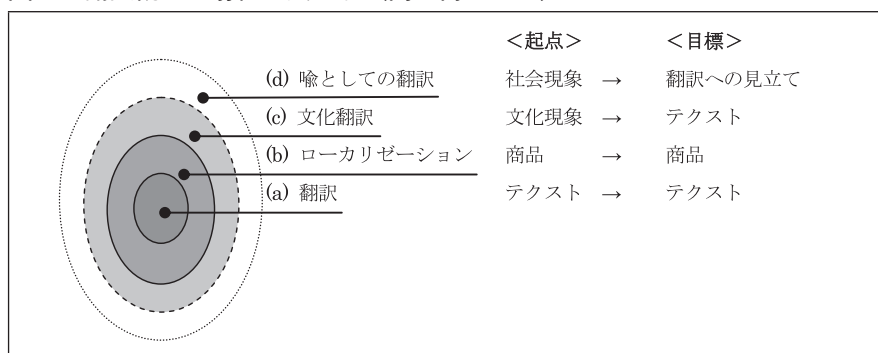
- (1) Intersemiotic Translation : 記号間翻訳 (ある記号を別の記号で表現する)
- (2) Interlingual Translation : 言語間翻訳 (ある言語を別の言語に翻訳する)
- (3) Intralingual Translation : 言語内翻訳 (ある言語内で言い換えをする)

(Jakobson, 1959/2000, p. 139)

コミュニケーション行為として翻訳を定位するならば、翻訳は単なる異言語間の変換行為ではないと看破したヤコブソンの概念規定を、人を取り巻く諸現象に応用していくことは自然な流れである。

このことを踏まえて、上記の河原 (2011) を敷衍してさらに細分化した図で示すと以下のようなになる (但し、これはあくまでもモデルであって、各々が典型性のあるカテゴリーであるため境界線は非離散的で極めて曖昧であり、クリアーに割り切れるものではない)。

図 1 : 翻訳概念の射程の広がり (同心円モデル)



これを概念規定すると、ひとつのモデルとしては以下のようなになる。

- (a) 翻訳：翻訳者が元の言語（起点言語）での原語書記テキスト（起点テキスト）を他の言語（目標言語）で書かれたテキスト（目標テキスト）に変えること (Munday, 2008/2012による定義)。
- (b) ローカリゼーション：外国市場の要求とロケールに応じて、デジタルコンテンツを言語的文化的に適合させること、およびグローバルなデジタル情報の流れにおいて多言語展開の管理をするサービスと技術を提供すること (バイカー&サルダーニャ, 2013, p. 124による定義)。
- (c) 文化翻訳：特定の文化の「意味」を解釈し、それを他者へ伝達すること (Geertz, 1973 による定義)。
- (d) 喩としての翻訳：翻訳を比喩として使うことで、社会現象を分析し説明すること (ピム, 2010参照)。

これに照らして(a)~(d)を分析すると、以下ようになる。まず、(a) (狭義の) 翻訳はヤコブソンの (2) 言語間翻訳と言える。精確には translating “text” in one language as “text” in another language (ある言語の「テキスト」を別の言語の「テキスト」として訳す) となる。翻訳のプロセスに着目すれば、translating “text” into “text” (「テキスト」を「テキスト」へ訳す) と言えるが、ここでは翻訳とは解釈したものを表現する等価構築行為 (河原, 2014) と考え (英語の “as” は「等価」を中核的語義とする; 河原, 2008)、translating “text” as “text” としている。

次に、(b) ローカリゼーションは、言語面に着目すればヤコブソンの (2) 言語間翻訳であるし、広く新たなロケール (locale; 製品の最終的な使用における言語的、経済的、文化的な要素の集合) に向けた製品の準備にとらえれば、(1) 記号間翻訳であるとも言える。この (a) と (b) はいわゆる「翻訳学」がその研究対象にしているものである。そして本稿では翻訳概念の射程の広がりを考えるうえで、人類学や社会学に端を発する (c) や (d) に着目して検討していく。

### 3. 翻訳概念の射程の可能性—文化翻訳と喩としての翻訳

「文化の翻訳」とは、特定の文化の「意味」を解釈し、それを他者へ伝達するという、文化人類学における研究営為を指す言葉として使用されてきた。クリフォード・ギアツ (Clifford Geertz) は、様々な文化的事象は、共同体の成員にとっての「意味」を運ぶ「象徴」であり、「文化」とは、そうした象徴の結束性を持った連なり (広義の「テキスト」) であるとした。人は、生についての知識や生に対する態度 (すなわち「意味」) を、そのような象徴の中に読み取り共有し、それを通して生を意味付けしていると捉えた。「文化の翻訳」とは、そうした特定の共同体の成員が織り出すテキスト、言い換えれば、彼ら彼女らが書いたテキストの中に、彼ら彼女ら自らがどのような「意味」を読み取っているかを読み取る行為、解釈を解釈するという多層的な解釈の過程自体を指している。

つまり、このような学説に依拠すれば、特定の文化的意味を解釈し、それを言語によって記述・説明することも「翻訳」となる。記述・説明のための言語は、その文化の言語であっても、他言語であってもよいことになるし、即時性を重視するならば、記述・説明を口頭や手話で行うことを「文化の通訳」と解しうる。このように広義に捉えると、外国文化などの記述、説明、展示といった日常的な実践も、広く文化の通訳・翻訳に含めることができよう。異文化コミュニケーションの円滑な実現という文脈で捉えなおすなら、文化の翻訳とはバイ・カルチュラルな媒介活動のすべてとも考えられるだろう (河原, 2013)。

「文化翻訳論」を議論してゆくうえで、このような流れが、人類学に依拠しつつ異文化コミュニケーション学へ敷衍し、かつ翻訳学へ落とし込むひとつの論調になる。以下、その論拠を論じる。

加藤（2010）によると、「文化の翻訳」はE. E. エヴァンス＝プリッチャードが1950年のレクチャーでこの語を使用したことが最初だという。

人類学者は〔中略〕彼ら〔未開民族〕の言語を学び、彼らの観念によって考え、彼らの価値観に従って感ずることを学び取ります。そこで、人類学者は、自分の文化の、概念上のカテゴリーや価値観によって、また人類学の全般的な知識によって、未開人との生活体験を、批判的に捉え、これに解釈を加えていくのです。言いかえますと、人類学者は、一つの文化を別の文化に翻訳するわけです。（エヴァンス＝プリッチャード, 1970, p. 22）

この文化翻訳に関し、小泉（1984）をまとめると以下のようなになる。つまりクリフォード・ギアツ（Clifford Geertz）によると、「意味」とは、知覚・認識・感情・情念・理解・判断・道徳などを含む思考一般である。そしてギアツは意味の運び手を表す「象徴」という概念と結びつけ、「文化」を象徴と意味のシステムであるとした。象徴とは人が生についての知識と生に対する態度を伝達し存続させ展開する手段で、その象徴に表現される概念が歴史的に継承されて作るシステムが文化である。そして、象徴によって導かれ組織された行動というダイナミックに創出される象徴（広義のテキスト）を読み解くことが文化の翻訳である。つまり、特定の文化で行動する人々が自ら書いたテキストを自らどう読み取っているかを読み取ること、理解を理解し、解釈を解釈するという構築行為が解釈人類学における「解釈」である。

このように、荒っぽく言えばギアツは、「文化」を「テキスト」と看做し、その広義のテキストを（狭義である）言語テキストで記述・説明することが文化の翻訳であるとしている。

特に近年はテキスト（text）という語が使われるが、これは文化を解釈することが、ある暗号的コードの裏に隠され固定された意味を、あたかも考古学者が遺跡を見つけ地質学者が地層を掘り出すように、あらかじめそこに存在する「なまの事実」として再発見することではなく、あたかもテキストを読みとるように、そこにダイナミックに創り出されつつある意味を再構築することであるということを主張している。つまり文化の分析とは、テキストという「何かについて何かを言ってい

る」(saying something of something) ものを、解釈を構築するという意味で読取ろうとするようなものである。ただしこのテキストは文字や言語ではなく行動によって書かれている。この「行動によって書かれたテキスト」というのは、必ずしも比喩ではない。というのは言語や文字ばかりでなく行動も、それが意味を運ぶかぎりにおいて象徴だからである。そこでこのテキストは、象徴によって導かれ組織された行動というダイナミックな象徴によって書かれていることになる。(小泉, 1984, pp. 249-250)

ここで、「テキスト」を「記号」、すなわち「人間が『意味あり』と認めるものすべてのこと」と読み替えてしまうならば、狭義の翻訳も文化翻訳に包摂されるし、文化翻訳も記号の意味づけ行為(という意味の構築行為)として捉えることができる。このことは、以下の「翻訳」概念の捉え方と相通じるものである。

喩としての翻訳。[中略] 情報伝達にさいして情報の発信者と受信者が個別に遂行するのは、つねに一種の翻訳行為—自己の「内面」の翻訳、および情報媒体の翻訳—である以上、いかなる言表、伝達、解釈であれ、それは一種の「翻訳」と解されてきた。(真島, 2005, p. 10, p. 34)

逆に言うならば、いわゆる狭義の「翻訳」についても、ヤコブソンが示すように、翻訳は、普通のディスコースの一種—メタ語用的な過程<sup>4</sup>を伴う、普通のディスコース(記号過程)の一種—である。すなわち、いわゆる「翻訳」は、異言語間で起こっているという点にのみ、その本質があるディスコース過程だという言語人類学的な見方と符合する。いずれにしても、この点において、「文化翻訳=translating “culture” into “text”」の“culture”を“text”と捉えなおすことで、あるいはある事象をテキストに置き換えること自体の営為を広義の「翻訳」と見立てることで、文化翻訳は狭義の「翻訳」と連続した地平で議論ができることになるし、文化翻訳における解釈の構築性を狭

<sup>4</sup> メタ語用的過程とは、言語を用いた行為も含むコミュニケーション行為は無限の解釈可能性を秘めているが、それを解釈可能な「テキスト」に統制・編成(regiment)するのがメタ語用作用であり、その作用が及ぶテキスト化(entextualization)をメタ語用的過程と呼ぶ(小山, 2009, pp. 184-203)。このように考えると、あらゆる対象(言語・行為・文化現象など記号全般)を言語化(テキスト化)する過程はメタ語用的過程であると言える。二言語間翻訳を典型とする翻訳概念は、ある言語のテキストを別の言語のテキストに置換ないし転移すると一般的には考えられているが、そこには当然、原文テキストのメタ語用的解釈が不可避的に介在する。文化翻訳における解釈性が人類学で論じられているが、その知見が言語間翻訳を主に研究対象とする翻訳学ないし翻訳研究にも応用できる／すべきであるという動機が本稿の背後にある。

義の翻訳に逆照射し、構築行為としての等価のダイナミズムを捉えた翻訳理論の展開も可能となる。では、その実益はいかなるものだろうか。

加藤（2010）は、人類学の難しさを、大きく2つの側面に分けている。

一つには、ある言語体系内で初めて成り立つ思考を、他の言語体系に「移し変えて」表現することの難しさである。〔中略〕この種の「翻訳の問題」は、「言葉」というものに依拠する学問（人文・社会科学）一般と文芸活動に広く見られるものであり、特に文化人類学的とはいえない。

他方で、リーンハートは、「ペリカンは私の兄弟だ」といった「未開人」の発言を、どんなに辞書的に正しく翻訳しても意味はないという、人類学に独特の「翻訳」事情も指摘する。そして肝心なのは、このような一見とっぴな等式を、「～のようなもの（アナロジー）」の関係としてではなく、まず現地人のように「同一のもの」の関係として肯定することだという。これは言い換えれば、慣れ親しんだ論理をいったん離れ、現地人の思考を直感的に理解せよということのようである。（加藤, 2010, pp. 114-115）

この点を筆者なりに敷衍してみたい。前者の難しさは言語表現全般にあてはまることだと言える。これは文化フィルター（Katan, 2009）がモデル化を通して機能するのと同じであると考えられる<sup>5</sup>。

すべてのフィルターは同様にモデリングを通して機能する。モデルは通常、例えば「現実」のような複雑なことを単純化しその意味を理解するうえで役に立つ方法である。あらゆるモデルはBandler and Grinder（1975）によれば、3つの原理から成り立っている。削除、歪曲、一般化である。人間がモデル化を行う場合、われわれ

---

<sup>5</sup> 分析哲学者のN. グッドマン（Nelson Goodman）は、世界制作の方法を論じるなかで、徹底した非実在性を主張し、ヴァージョンの複数性、根本的な相対主義を主張している。「世界制作はわれわれの知るかぎり、つねに手持ちの世界から出発する。制作とは作り直しなのだ」と（グッドマン, 2008, p. 26）。そしてさまざまな世界制作の方法として、合成と分解、重みづけ、順序づけ、削除と補充、変形を挙げ（pp. 27-41）、「理解と創造は手を携えているのである」と結論づける（p. 49）。そうであるならば、世界制作に多大な関与をする記号とその意味作用も、同様のことが言える。対象をどのように把捉するかは、グッドマンが言ったようにどのような世界を創造的に制作するかと深く関係する。つまり、分割し、組み合わせ、強調し、順序づけ、削除し、充填し、肉づけし、歪曲さえする自由があり（pp. 41-42）、この自由はまさに解釈者の心的営みであり、その場、当該コンテクストとのインタラクションを通じて意味を構成していく営みを行いながら、当座の一回的な意味（sense）を得る、というのが解釈の一般的なあり方である。

これは現実に行われていることすべてを知覚することはできない（削除）。またわれわれが目にするものを選択的に焦点化し、それを既知のものや目を引くものへと適合する傾向がある（歪曲）。そして細部は自分自身のモデルから埋め合わせをしたり、突出した差異をなだらかにしたりして（一般化）、結果として出てくる「世界の写像」を有益なものにするのである。（Katan, 2009. 翻訳は筆者による）

つまり、ある現実（reality）を言語によって表す場合（翻訳対象たるテキストもここにいう「現実」と考えることもできる）、すべてをそのまま（別の）記号（ここでは特に、言語）に移し変えることは原理上不可能であって、文化フィルター（ないしモデル）を通して何らかの削除・歪曲・一般化が起こる。また、語られること（翻訳物も含む）はその現実の一部であり（言語はパートニミー<sup>6</sup>である、という言い方ができる）、その現実の話し手（書き手）が現実として把握したことの構築結果でもある。さらに語られたこと（言説）がコミュニケーション行為を通して伝達されたり伝播したりし、それが逆照射的に現実を規定することで、その現実も無限更新的に意味の改変が行われる（翻訳の対象たる原テキストの意味解釈の改変を含む）、という構築主義的な捉え方に立つと、翻訳を含む表現行為の一般論として、学問一般の問題意識を共有することもできよう。

また、前者のうち「他の言語体系に移し変えて」という箇所に着目すれば、サピア・ウォーフ仮説の言語相対性の問題も浮上する（先ほどの加藤の引用の前半部分の指摘はこの点だといえる。但し、同仮説の本義は言語構造・語用論的無意識・使用者の言語意識という三者間の相関と齟齬に関する一般理論を言う。cf. 小山, 2011, pp. 10-15）。さらに、ここにいう「言語」を国民国家＝民族言語＝文化という近代主義的捉え方から解放した考え方を基盤にすれば、言語的多様性の今日的な議論とも接合可能であろう。

以上、前者の問題に関しては、およそ言語表現一般が抱える根深い論点を深く追究することで、翻訳に伴う難しさをさらに深く議論することが可能になるとと思われる。後者の難しさに関しては、青木保が『文化の翻訳』のなかで詳述している。

ロドニー・ニーダムが引き出す問題は次の3点に集約される。すなわち、

- (1) 英語の belief が外国語に逐語的に翻訳されるとき、それらの語に与えられる意味の多様さは驚くばかりで当惑せずにはいないこと、
- (2) 他の言語と比較する場合、その語に含まれるさまざまな意味の組み合わせの中

---

<sup>6</sup> パートニミー（paronymy）とは、部分／全体の隣接性に基づく表現のことを言い、空間／場所の隣接性に基づくトポニミーと並んで換喩の下位類をなす。ここで換喩とは、単一領域内の要素の隣接性に基づく比喩の一種である（辻, 2013, pp. 46, 292）。



から一つだけ特別の意味を引き離して捉え、それを英語 belief の等質語として示すことは一見可能なようにみえても、それらの意味に対して英語による一つの解釈が根本的に異なるような言語もあって、翻訳に相当するとされた語のもつさまざまな含意の中の一つだけを決定的なものとして取り上げることは不適当であること、

- (3) ヌアー人の場合にみられるように、英語の belief に相当する言語概念がまったく存在しない言語があること、の三点である。

[中略] ここに引用した検討から推量しうることからみても、翻訳の問題が人類学の認識の根幹に横たわる問題であることは理解される。(青木, 1978, pp. 57-58)

この指摘は狭義の翻訳にも当てはまるのではないだろうか。つまり、青木 (1978, p. 51) も言うように、異質の言葉・概念を母国語におけるそれによって「読み込んで」しまったり、人類学者（あるいはこの場合、翻訳者）それ自体が自分の文化的偏向をすでに有していたりするという事実がある。言語が「象徴による文化への手引き」（サピア）であるならば、この手引きには常に両刃の剣が隠されているというべきなのだろう。

そして、このことは加藤 (2010) によると、大塚和夫のいう、フィールドワーク中に「明確な言葉での整理ができないまま、『なんとなくそんなものか』といったかたちで、納得してしまう『理解』、あるいはアルフレッド・シュッツのいう、論理的というより身体感覚的な「異文化の第一次的理解」、または青木保のいう、「論理的—構造的な理解」に対する「直感的—メタファー的理解」といった、言語体系外の「生活実感」と呼べるものに依拠する割合が高い文脈では特にそうであろう。コミュニケーションの重要な手段である五官による言語的・非言語的活動も、文化による型づけを受けていることによって、総体としての文化が果たして他の総体へ翻訳されるものなのかという根本問題は、人類学だけでなく、翻訳学も常に自ら突きつけなければならない剣である。つまり言語間翻訳の営為において、自明だと考えて習慣的に訳語を当てている行為に対して、つねに原文と訳文（の1つ1つの単位、およびテキスト全体）のもつ言及指示機能と社会指標機能<sup>7</sup>を精査し、特にその文化的・社会的な含意 (social / cultural connotation) を熟慮する重要性を説いた指摘であると了解されよう。

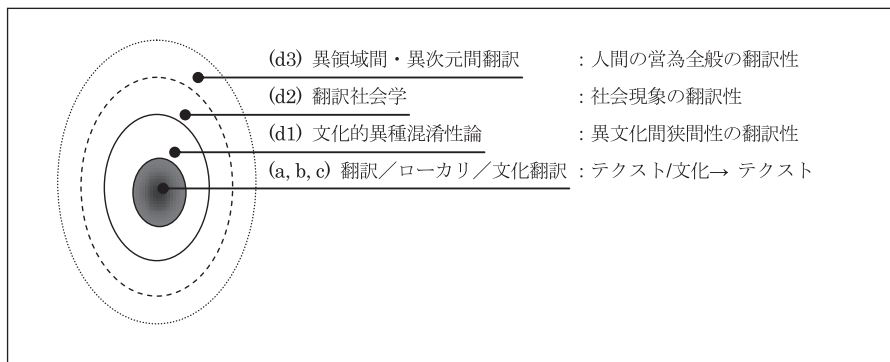
文化人類学（アメリカ）ないし社会人類学（イギリス）におけるメタファーとしての

<sup>7</sup> 言語は言及指示機能（言及対象の指示、命題の述定）だけでなく社会指標性（アイデンティティ、権力関係、親疎関係の指標）も有し、ミクロ・コンテクストにおける状況の関係性の中だけでなく、広く、社会・文化・歴史的マクロ・コンテクストにも関連つけて意味が規定されてゆく（小山, 2008, pp. 309-311）。

「翻訳」＝「文化翻訳」の考え方の典型は、文化自体を解釈可能なテキストに見立て、それを言語テキストによって記述・説明すること、またこの記述・説明行為は解釈を解釈し記述するという複層的構築行為であると考えることである。このように人類学が問題意識として有している論点を共有することは翻訳学にとっても実益があることを以上で少し検討した。

今度はその考え方をさらに拡張し、異領域間・異次元間を行き来すること、ないしその狭間に存在すること、あるいはそういう社会現象自体を「翻訳」と捉える考え方について検討してみたい。これには、大きく分けて3つ考えられる。これは図2のなかの(d) 喩としての翻訳<sup>8</sup>をさらに細分化するものである（但し、これも図1同様、あくまでもモデルであって、境界線は極めて曖昧であるし、「文化翻訳」と「喩としての翻訳」は一般的には同列に捉えられている）。

図2：喩としての翻訳概念の同心円モデル



<sup>8</sup> 「喩」とは「比喩」、つまり「メタファー」のことである。精確に言うならば、「A が X として (“as”) 見立てられる」という言語形式を一般論として敷衍すると、「A as X / X としての A」(直喩；シミリー)、「A be X / X である A」(隠喩；メタファー)となる。厳密に言えば、“as” は中核的意味として「等価」(equivalence; equal value)を表しており(河原, 2008)、本来、被説明項 A とは異なる説明項 X を、A と等しい (equal) 価値を有するもの (value) と看做すことによって、その本質的一面を詳らかにするレトリックである。そして、隠喩形式の場合は、言語表現上比喩であることが隠れているが、「A be X / A は X である」という言語形式には記述文、定義文、隠喩文の3つの機能があり(田中, 2002)、隠喩文として直喩文と同様の機能を有する。

このようにメタファー(隠喩)とは、「人生とは旅である」の如く、「類似性に基づく比喩」と定義される概念である(谷口 2003, p. 2)。つかみどころのない多義的・多面的な被説明項を、経験基盤に根ざした具体物によって見立てることで説明をする、というのがメタファーの根本である。だとするならば、“translation as X”という議論(本稿で言う(a)(b)(c)の翻訳概念)が翻訳をメタファーによって語る言説であるのに対し、「メタファーとしての翻訳」「喩としての翻訳」(本稿で言う(d1)(d2)(d3)の概念)とは、“X as translation”という構図であり、「翻訳」という抽象概念によって、さらにそれより抽象的な事象を説明しようという試みであると言える。

人類学にいう文化翻訳は、あくまでもそのプロダクトは「テキスト」であるが、本稿で言うところの「喩としての翻訳」は (d1) 文化的異種混淆性論においては異文化間の峽間性を、(d2) 翻訳社会学においては社会現象を、そして (d3) 異領域間・異次元間翻訳においては人間の営為全般を翻訳であると見立て (メタファーの機制)、それらについて言説を繰り広げることであり、直接くそれらの「意味」を解釈しそれを他者へ伝達する>こと、つまりテキストとして提示することよりも、翻訳として喩えることができる現象を捉えるものの見方を提供していると考えられる。つまり、その語り口のなかに翻訳のメタファー性が潜んでいる、と位置づけられるため、本稿では「文化翻訳」とは操作上、別の概念として捉え、文化翻訳よりも翻訳性がよりメタフォリカル (比喩的) であるとして分析する。したがって、後述する大橋 (1993) はそのタイトルが『文化の翻訳可能性』とあるが、これは人類学に言う文化翻訳を包摂する、さらに広い意味での「喩としての翻訳」として文化の翻訳可能性を論じていると本稿では位置づける。

文化的異種混淆性の議論は、とくにポストコロニアル翻訳理論の分野が注目される<sup>9</sup>。また「喩としての翻訳=翻訳社会学」はピム (2010) が紹介している「アクターネットワーク理論」のことである。これはネットワークを形成する相互作用を翻訳として捉えて理論化するものである (M. カロンやB. ラトゥールらが手掛ける)。この理論では、「翻訳」は分析方法論であり、分析対象ではない。そして翻訳を「ある人または集団が、他の人または集団『の代わりに』あるいは『を代表して』事柄を述べるプロセス」であるとしている (ピム, 2010, pp. 256-257)。

最後に、「喩としての翻訳—異領域間・異次元間翻訳」であるが、これは大橋良介 (編)『文化の翻訳可能性』や、山本真弓 (編著)『文化と政治の翻訳学』などが援用する翻訳概念である。大橋は文化の翻訳可能性について、翻訳概念を脱構築し、翻訳概念一般を単なる言語レベルの枠から解放して、一挙に文化理論へまで拡大し展開するこ

<sup>9</sup> その典型はH. バーバの理論である。彼は、「翻訳不在の翻訳論」であるとピム (2010) が評したように、翻訳をメタファーとして使いながら、ポストコロニアリズムを展開する論調を採っている (バーバ, 2005)。「その中核には、近代の西洋諸国家による植民地支配とそこからの離脱を、支配・被支配という一方的な影響関係として見るのではなく、帝国主義の伸長過程における宗主国の圧力と植民地における抵抗との永続的な対抗確執の過程として捉える視野が存在する」(p. 428 訳者解説)。要するに両者の境界構築のメカニズムを単純な二項対立の構図ではなく、交渉と抵抗、妥協と融和が交錯する「第三の空間」と捉えているところに、バーバの神髄がある。そのために導入したのが、両価性/異種混淆性/擬態/固定観念/亀裂/中間領域性ないし峽間性/雑種性/時間差/身体的遂行性/不確定性などの概念で、これらを精神分析の学知を援用しながら分析し、アイデンティティ/行為主体性/帰属の問題を理論化した。翻訳に関しては、「変化がもたらす転換の価値は、多様な要素の言い換え、翻訳にある。それらの要素は、これ [中略] でもなければ、あれ [中略] でもない別の何かであり、それが前二者の条件や領域に介入してくるのである」と言っている (p. 49)。もちろん、ここに言う翻訳は記号間翻訳を指しているのである (つまりピムの言う翻訳不在の翻訳論である)。

とであるという（大橋, 1993, p. 13）。そして文化の翻訳の問題群として、近代における欧州から非欧州への文化・技術の移転、異文化芸術の美的経験、政治体制の移転、文学や思想の翻訳による移転、そして異文化間の出会いや交流そのものを「翻訳」として捉えるという視点から議論を展開している。ここまで来ると、言語間の翻訳を「翻訳」とし、起点テキストと目標テキストの本質的な意味の同一性を「等価」とであると見なし、いた固定概念がかなり脱構築されることがわかるだろう。

本項の締めとして、青木（1978）が文化翻訳者の使命について述べている箇所を引用したい。

ベンヤミンにならっていうならば、人類学者の使命は、異文化のなかに鎖されているあの純粋文化を翻訳固有の文化のなかに救済すること、異文化のなかに囚えられているこの純粋文化を翻訳のなかで解放することにあるとあってよいのである。（青木, 1978, p. 171）

#### 4. おわりに—翻訳概念の多義性

以上、多岐にわたる翻訳概念の多義性と射程の広がりについて論じたが、いずれも共通するのは、「等価構築性」である。さまざまな政治的イデオロギーを有しつつも、人は外界のあるものをカテゴリー化する<sup>10</sup>。その際、歪曲を伴った世界構築の行き来を行う。これが人の言葉を使ったダイナミックな無限更新的記号過程であり、その一現象が「（言語間）翻訳」なのである。したがって、ヤコブソンが示した記号間翻訳という根源的契機が、まさに人の言語コミュニケーションの原理的根源であり、そこに潜むイデオロギー的歪みについて自覚的になるためには、以上のような「翻訳メタファー」が有効であることが了解される。

また翻訳概念の射程を広げることで、言語間翻訳を喩としての翻訳の視点から文化変容の過程として捉えなおすことも可能となる。そうすることによって、言語間翻訳自体も、文化・技術の転移、異文化芸術の美的経験、政治体制の転移、文学・思想の転移、そして異文化間の出会いや交流に寄与し、目標文化の文化変容のみならず、起点文化への逆照射的な影響をももたらす文化的相互作用として捉えることも可能となる。

---

<sup>10</sup> カテゴリー化／等価行為は、コンテキスト負荷性（社会指標性）のみならず、そのコンテキストが帯有する恣意性・文化相対性・利害関心負荷性（象徴性）も有している。

## 参考文献

- Bandler, R. & Grinder, J. (1975). *The structure of magic I*. Palo Alto, CA: Science and Behavior Books.
- Geertz, C. (1973). *The interpretation of cultures*. New York: Basic Books.
- Jakobson, R. (1959/2004). "On linguistic aspects of translation". In L. Venuti (Ed.). (2004). *The translation studies reader*. 2nd edition. (pp. 138-143). London & New York: Routledge.
- Katan, D. (2009). "Translation as intercultural communication". In J. Munday (Ed.). *The Routledge companion to translation studies*. (pp. 74-92). London & New York: Routledge.
- Lakoff, G. (1993). "The contemporary theory of metaphor". In A. Ortony (Ed.). *Metaphor and thought*. (pp. 202-251). Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago.
- Munday, J. (2008/2012). *Introduction to translation studies*. London & New York: Routledge.
- 青木保 (1978). 『文化の翻訳』東京大学出版会.
- ベイカー, M・サルダニャ, G. (2013). (藤濤文子・監修・編訳). 『翻訳研究のキーワード』研究社. [原著: Baker, M. & Saldanha, G. (2009). *Routledge Encyclopedia of translation studies*. London & New York: Routledge.]
- エヴァンス=プリッチャード, E. E. (1970). (吉田禎吾・訳). 『人類学入門』弘文堂.
- グッドマン, N. (2008). (菅野盾樹・訳). 『世界制作の方法』ちくま書房. [原著: Goodman, N. (1978). *Ways of worldmaking*. Cambridge, MA: Hackett Pub Co Inc.]
- バーバ, H. (2005). (本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美・訳). 『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局. [原著: Bhabha, H. (1994). *The location of culture*. London & New York: Routledge.]
- 池上嘉彦 (1984). 『記号論への招待』岩波新書.
- 加藤恵津子 (2010). 「自文化を書く一だが、誰のために? 『文化の翻訳』をめぐるネイティブ人類学徒の挑戦」山本真弓(編著)『文化と政治の翻訳学: 異文化研究と翻訳の可能性』(109-143頁). 明石書店.
- 河原清志 (2008). 「ことばの意味の多次元性: "as" の事例分析」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科提出修士論文 [未出版].
- 河原清志 (2011). 「概説書に見る翻訳学の基本論点と全体的体系」日本通訳翻訳学会・翻訳研究育成プロジェクト(編)『翻訳研究への招待』第5号: 53-80頁.
- 河原清志 (2013). 「文化の通訳・翻訳」石井敏・久米昭元他(編)『異文化コミュニケーション事典』(311頁). 春風社.
- 河原清志 (2014). 「翻訳等価論の潮流と構築論からの批評」日本通訳翻訳学会・翻訳研究育成プロジェクト(編)『翻訳研究への招待』第5号: 9-33頁.
- 小泉潤二 (1984). 「解釈人類学」綾部恒雄(編)『文化人類学15の理論』(243-262頁). 中公新書.
- 小山亘 (2008). 『記号の系譜: 社会記号論系言語人類学の射程』三元社.
- 小山亘 (2009). 『記号の思想』三元社.
- 小山亘 (2011). 『近代言語イデオロギー論: 記号の地政とメタ・コミュニケーションの社会史』三元社.
- 真島一郎(編) (2005). 『だれが世界を翻訳するのか: アジア・アフリカの未来から』人文書院.
- 大橋良介(編) (1993). 『文化の翻訳可能性』人文書院.

- ピム, A. (2010). (武田珂代子・訳). 『翻訳理論の探究』 みすず書房. [原著: Pym, A. (2010). *Exploring translation theories*. London & New York: Routledge.]
- 田中茂範 (2002). 「『AはBである』をめぐって: 記述文・定義文・隠喩文の基本形式」 山田進・菊地康人・柘山洋介 (編) 『日本語: 意味と文法の風景: 国広哲弥教授古稀記念論文集』 (15-30 頁). ひつじ書房.
- 谷口一美 (2003). 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』 研究社.
- 辻幸夫 (編) (2013). 『新編 認知言語学キーワード事典』 研究社.
- 山本真弓 (編著) (2010). 『文化と政治の翻訳学』 明石書店.